NJ素流協News
平成22年５月31日
第65号

平成22年５月31日発行・発行所　ノースジャパン素材流通協同組合　〒020-0024 盛岡市菜園１丁目3-6（農林会館９階）
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / http://www.soryukyo.or.jp/index.html

ノースジャパン素材流通協同組合 第七回通常総会開会

ＮＪ素流協第七回（平成二十二年度）通常総会と報告会が、去る五月十四日（金）ホテルメトロポリタン盛岡ニューウィング（盛岡市）において開催された。

▽通常総会

組合員総数九十六名中、本人出席三十二名、委任状出席十七名、書面議決書提出三十一名、計八十名の出席の下、石川勝也副理事長の開会の辞により開催された。

下山裕司理事長の挨拶の後、伊藤賢二氏（北上市）を議長に選任し、提案されている十の議案について審議が行われた。全て原案通り承認されたが、主なものについて内容を紹介します。

一、第一号議案〔平成二十一年度事業報告書・決算関係書類承認〕

昨年度も、新設住宅着工戸数が八十万戸を割るなど厳しい状況であったが、取引先合板工場の国産材利用率の上昇に伴い、ＮＪ素流協の素材取扱量は合板用針葉樹素材を主体として二十二万二千㎥となり、計画量、前年実績いずれをも二六％上回った（表１）。

事務局の管理体制については、三部制への変更や、合板工場の決済条件の変更に伴う販売ソフトのシステム変更等を行った。さらに県補助金による森林整備加速化・森林再生事業の流通専門部会事務局として、運搬経費助成及び高性能林業機械等導入に関する事務及び組合員に対する指導を行った。

表１　平成21年度ＮＪ素流協素材取扱実績

区分		材積（㎥）	計画比	前年比
合板用素材	会員生産によるもの	192,907	123%	124%
	システム販売によるもの	13,547	135%	111%
製材・集成材用素材、土木用素材、他		15,701	157%	180%
合計		222,155	126%	126%

二、第二号議案〔利用分量配当〕

二十一年度出荷量について一㎥あたり八円を配当（前年＝五円）。

三、第三号議案〔平成二十二年度事業計画・収支予算決定〕

国産材の安定供給体制の充実、木質系資材の具体的有効活用、伐採跡地の森林再生を念頭に置き事業を展開する。計画数量は、合板用二十二万㎥（会員二十万五千、システム販売一万五千）、その他三万㎥、計二十五万㎥とする。

教育関連事業として組合員の後継者を対象とした経営技術研修会等を開催、利用拡大関連事業として低質材の利用拡大実証事業、フォレスト再生モデル実証事業を行う。

四、第四号議案〔平成二十二年度手数料率決定〕

販売代金の三・五％とする。

五、第九号議案〔共同販売事業規約一部変更〕

ＮＪ素流協から組合員への販売代金支払いに関し、前渡しができるよう規約を改める。

六、第十号議案〔役員改選〕

前年度までの役員を再任とし、青森県国有林材生産協同組合理事長を新たに理事に選出した。

▽通常総会報告会

通常総会に引き続き、東北森林管理局長ほか来賓を迎えて開催された。下山理事長は冒頭次のように挨拶した。

『世界的不景気は二十二年度に入り若干回復の気配が見えてきたように報じられているが、我が国林業においては大分タイムラグがあり、いまだ厳しい状況が続いている。このような中、昨年度はＮＪ素流協の事業において発生した様々な問題に対し、組合員の皆様の協力を得ながら対応してきたが、こうして共に頑張ってきたことが組織の抵抗力を強くしてきたと思う。この感触を忘れずに新年度も前向きに進んでいきたい。

新年度は事業の安定的な継続を柱とし、同時に「森林・林業再生プラン」など将来に向けた変化にいち早く適切に対応、新しい事業もあわせて、地に足のついた事業展開を行っていきたい。』

続いて、高橋早弓常務理事よりの総会報告と優良出荷者に対する表彰（表2）の後、ご来賓の古久保英嗣東北森林管理局長、小田島智弥岩手県農林水産部長（代・竹田光一林務担当技監）、岩手県森林・林業会議理事長、北日本プライウッド㈱小野繁代表取締役社長様よりご祝辞を頂いた。小野社長様の祝辞の要旨を紹介します。

『統計によると住宅着工戸数は連続して減少しているが、その内木造住宅の比率は十二か月間五〇％代を維持し、若干明るい兆しが見えている。我々合板業界も国産材時代へと確実にシフトを始めている。

その象徴的な出来事として、当社グループのセイホク㈱が岐阜県中津川市に一〇〇％国産材使用の合板工場を建設することになった。国は「森林林業基本計画」に基づき、国産材の使用を平成二十七年度までに二千三百万㎥まで拡大、合板業界はその内三百万㎥使用することとしている。一方森林間伐面積も拡大することとしている。C・D材や細い材が合板に利用できるようになったこと、我々が開発した厚物合板の需要が出てきたこと、国等が国産材供給に本気で取り組み始めたことが、この工場建設決定の背景にある。

世界の林業に目を向けると、そもそも林業は先進国型の産業であり、林業の三分の二の生産は先進国で行われている。ドイツでは年間生産七千七百万㎥の内三〇％を輸出しており、約百万人の雇用を生み出し、二十兆円の産業となっている。

木材を搬出する森林は経済資源と環境資源としての機能・側面を有しており、これからの世界経済のニーズに最も応えうる産業であると確信している。我々を取り巻く状況が依然厳しいのは事実だが、プリウスの売れ行きが好調なように、消費者は価格と同等かそれ以上に環境に配慮するようになっている。日本の自然を守り、地球温暖化を防ぎ、健康にも人にも優しい国産材製品の時代が近い将来必ず来ると確信している。今後とも素材の供給をよろしくお願いいたしたい。』

▽懇親会

報告会終了後、ホクヨープライウッド㈱常務取締役福田忠一様の乾杯のご発声でもって開会され、しばらくの懇談の後、新理事の青森県国有林材生産協同組合理事長坪晃様の中締めでもって流れ解散となった。

表２　表彰者名簿

第７回通常総会報告会　表彰者
横澤林業　株式会社
青森県国有林材生産協同組合
山中林業
上北森林組合
有限会社　丸大県北農林
二戸林業
青森県森林整備事業協同組合
株式会社　小笠原林業
平山林業
有限会社　佐々木農林
高橋木材

一葉　樹木の病害虫（2）

飛び腐れ

前号の「はちかみ」同様スギやヒノキアスナロの幹の内部が変色・腐朽する被害（写真１）である。こちらもカミキリムシの仲間のスギノアカネトラカミキリ（写真２）の食害によって生ずる。

このカミキリは、枯枝に産卵し、孵化した幼虫が枯枝の内部を伝って幹の中に侵入する。幼虫は幹の内部を食害して成長し、又枯枝に戻って蛹化・羽化し、その基部に穴を開けて脱出する（図１）。一生を通じて樹木の死んだ部分だけで活動する。

生きた部分に触れることがなく、樹木の健康には全く関与しないので、被害木は弱ることもなくその後も正常に生長を続ける。被害による変色や腐朽は、必ず枯枝を中心に発生（写真３）し、幹の内部に巻き込まれた後も拡大し空洞化する場合もある（写真４）。

この被害は、樹木に対する被害というよりは、幹を利用する人間にとって極めて厄介な被害といえよう。

立木で被害の有無を判定する場合、被害初期であれば、次の方法で見分けることができる。

1　枯れ枝が多数ついていないか（写真５）。

2　枯枝の基部に孔がないか（写真６）。

3　枝の切り口にある穴に細かい粉が詰まっていないか（写真７）。

しかし、樹木の生長に伴って、被害に関与した枯枝が幹の中に巻き込まれてしまえば、外部から被害の有無を判断することはできない。外見上健全木と見なされた木を伐採・製材して初めて被害の存在を知ることも多い。

被害は、枯枝を介して発生することから、枝打ちが適正になされている林には発生しない。

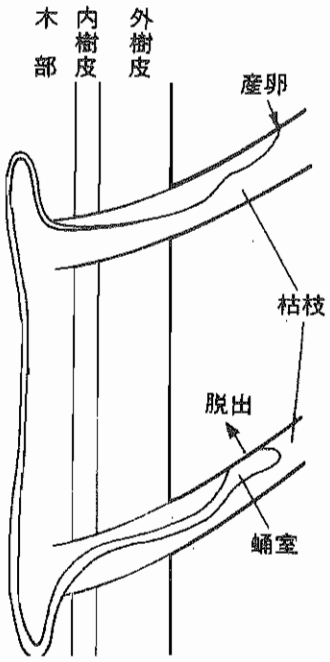

図１　被害模式図（スギ・ヒノキのせん孔性害虫（1986）から）

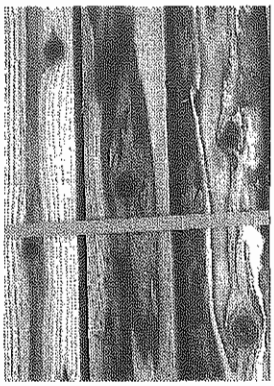
写真１　被害材の製品

写真３　被害部の縦断面

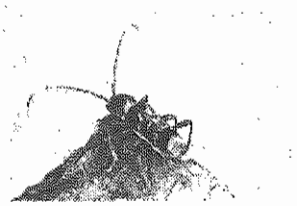
写真２　成虫（体長約１㎝）

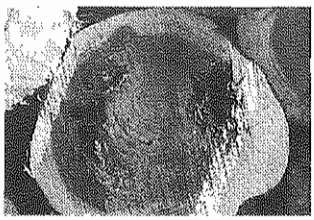
写真４　空洞化した被害部

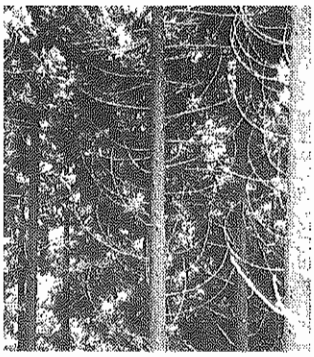
写真５　枯枝が多いスギ

写真６　枯れ枝の基部の穴（径２㎜位）

写真７　枯れ枝の断面の穴に粉が詰まる

作業道散策2

静御前の花二つ

カタクリの花が咲く頃、ヒトリシズカ（写真1）が咲き、少し遅れてこれとよく似たフタリシズカ（写真2）が咲く。

両種とも森の中にひっそりと清楚な花を咲かせることから、その名は源義経の想い人「静御前」になぞらえて付けられたといわれている。

どちらも4枚の葉の中心から細長い穂を出して、これに白い花をつける。この穂がヒトリシズカは一本で「一人静」で、フタリシズカは二本で「二人静」というわけである。

写真１　ヒトリシズカ

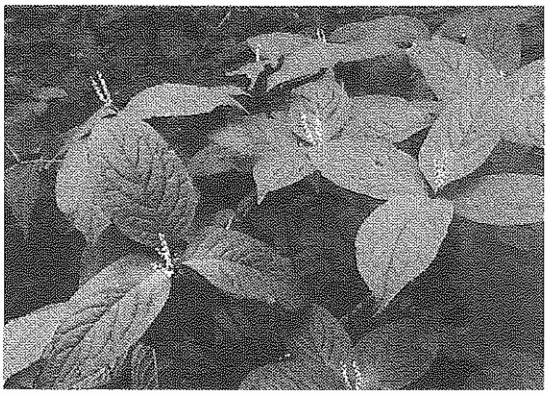

写真２　フタリシズカ

ヒトリシズカはヨシノシズカの別名を持ち、義経の逃亡を助けるために静御前が、”賤（し）づやしづ　賤づのおだまき繰り返し　昔を今に　なすよしもがな“と舞った。追っ手はその舞に見とれて義経の追討をしなかったという故事の能「吉野静」に由来する。

フタリシズカは、吉野の野で若菜を摘んでいた女が亡霊に憑かれ、神社の宝蔵に収められていた静御前の舞装束を着けて舞い始めたところ、同じ装束を着けた静御前の亡霊が現れて、二人揃って舞ったという故事の能「二人静」（写真3）に由来する。

写真３　能 二人静

冗談欄　簡易老化度判定法

昔は「平均寿命」だけであったが、近年何歳まで健康で生きられるかという「健康寿命」というものが出てきた。

平均寿命と健康寿命が一致するのが理想であるが、現実は六～八歳ほど健康寿命が短くなっている。

それだけの間、不健康に生きていなければならないのである。

「死ぬまでボケずに生きる会」という会がある。

大人の脳細胞は年齢とともに減少し、再生しないというのは間違いで、脳力トレーニングをしたり、十分な睡眠と頭に必要な栄養をとれば、大人でも脳細胞は新たに作られると考えられている。

ペーパーテストで脳の老化度合いが判定されている。幾つかの質問にハイ、イイエで答え、点数により「かなり老化している」とか「老化の兆しがある」などと判定されるものである。

もっと簡単な判定法がある。頭を振ってみるのである。カランカランなどと音がしたら、脳細胞が減って、隙間ができていると判定するのである。

物忘れがひどくなり、病院へ行ったら医者から頭を振ってみるようにといわれた。

「何も音がしません」と答えたら、「ハーン、空っぽになってしまったか。」と言われてしまった。

平成22年５月分の販売実績

1　合板用出荷量を前月と比較すると、スギが約240㎥増加、カラマツが約840㎥増加、アカマツが約220㎥減少し、全体では約860㎥増加している。昨年同月と比較すると、スギが約6,310㎥増加、カラマツが約7,790㎥増加、アカマツは約1,270㎥増加し、全体では約15,370㎥増加している。工場別では、ホクヨープライウッドが前月比較で約250㎥減少、昨年同月比較では約9,930㎥増加、北日本プライウッドは前月比較では130㎥増加、昨年同月比較では約2,910㎥増加となっている。これら増減の主原因は、工場側の受入調整によると考えられる。なお、これら合板用出荷量のうちシステム販売取扱量は前月より約70㎥減少している。

2　その他（合板用以外）の出荷量は前月より約1,490㎥減少、昨年同月より約1,730㎥増加している。

3　今年度の年間計画量に対する２か月あたりの出荷量の割合（目標達成率）を16.7％とすると、今月の合板用出荷及び全体出荷実績は、計画数量を1～1.2ポイント上回る進捗状況となっている。

（㎥、％）

樹種	長級	販売先 合板用 ホクヨープライウッド㈱	北日本プライウッド㈱	その他	小計	その他	計	累計 合板用	樹種別割合	その他	計
スギ	2.0	2,393	2,502	1,842	6,737			13,383			
	4.0	1,164	1,259	72	2,496			4,842			
	計	3,557	3,762	1,914	(809) 9,233	1,908	11,141	(1,347) 18,225	46.9	5,157	23,382
カラマツ	2.0	3,794	2,053	616	6,462			12,497			
	4.0	1,554	1,345		2,899			5,383			
	計	5,347	3,398	616	(284) 9,361	261	9,622	(907) 17,880	46.0	672	18,552
アカマツ	2.0	852	222		1,074			2,452			
	4.0	170	25		195			304			
	計	1,023	247		(0) 1,270	0	1,270	(0) 2,757	7.1	0	2,757
その他針						50	50	0	0.0	50	50
広葉樹						10	10	8	0.0	68	76
合計		9,927	7,407	2,530	[0] (1,093) 19,863	22,229	22,092	[0] (2,254) 38,870	100.0	5,947	44,817
目標達成率								17.7		19.8	17.9
計画量								220,000		30,000	250,000

長級2.0には2.1を含む、（　）はシステム販売取扱量（内数）、［　］はストックヤードからの出荷量（内数）

落穂拾い

先月号（第六十四号）の「落穂拾い」欄で、日本の代表的な妖怪である（河童）と伝説上の怪獣・妖怪の（鵺（ぬえ））について書いたが、それが掲載されているＮＪ素流協ニュースが発刊された後に、ある友人から〝こんな面白い文章がインターネット落書（らくしょ）として載っているよ〟と言って、そのコピーを呉れた。この落書の中に（鵺（ぬえ））が載っているので、そのまま再掲することにする。内容は、鳩山由紀夫首相の政治姿勢をさまざまな鳥の名前に喩えて揶揄する文章である。

～　日本には謎の鳥がいる。　正体はよく分からない。　中国から見れば「カモ」に見える。　米国から見れば「チキン」に見える。　欧州から見れば「アホウドリ」に見える。　日本の有権者から見れば「サギ」だと思われている。

オザワから見れば「オウム」のような存在。　でも鳥自身は「ハト」だと言い張っている。　「カッコウ」だけは一人前に付けようとするが、お「フクロウ」さんに「タカ」っているらしい。　それでいて、約束したら「ウソ」に見え、身体検査をしたら「カラス」のようにまっ黒、疑惑には口を「ツグミ」、釈明会見では「キュウカンチョウ」になるが、実際には「ヌエ（鵺）」のようだ。　頭の中身は「シジュウカラ」、実際は単なる鵜飼いの「ウ」。

「キジ」にもなる「トキ」の人だが、私はあの鳥は日本の「ガン」だと思う。～

この「謎の鳥」落書がインターネット上に登場した当初は、文章の中の鳥の数が「カモ」や「チキン」など七羽だったらしいのだが、ネット上をこの謎の鳥が飛び回っているうちに、インターネット読者が次々と落書に手を加えて十九羽になったというのである。筆者が面白く思ったことは、先月号の落穂拾いを書いた時にはインターネット上の「謎の鳥」落書の存在を承知していなかったのだが、同じ時期に鳩山首相やその政権について、不気味で、曖昧で、得体の知れない「鵺的存在」として認識・比喩する人たちがいることであった。それにしても、伝説上の妖怪・「ぬえ（鵺）」が目覚めたとは……。

そうこうするうちに、六月二日になって突然、鳩山由紀夫氏が首相を辞任すると発表してしまった。これも驚きであったが、最近の鳩山政権をめぐる国内政治情勢の混迷振りや逼迫した出口のない鬱積した状況に照らしてみると、なるようになったというか、当然の帰結といえるかもしれない。ああ、無常。